

異郷の伝説

アシュウィンへ

I

———ここで何してるの？

白鳥の翼をもつ少年は、何も答えなかった。

———そう、君よ。どうしてここにいるの？日本に天使はいないはずだけど？

———僕は天使じゃない。

———そう見えるわ。

———君こそ、ここで何を？日本人じゃないようだけど、君は何？

———知らない。

———僕も自分のことが分からない、でも天使ではない。

———天使を見たことあるの？

———ない。

———神様は見たことある？

———ハハハハ、とんでもない。

———神様を信じないの？

———信じない。絶対に。

———ふうん。

———・・・

———とにかく、ここは仏教徒の国よ。

———分ってる、それぐらい。

———嫌われたくなければ、翼を見せない方がいいわ。ここではキリスト教に関するものは歓迎されないから。

———ひとつ：天使はキリスト教にもとづくものではない。

ふたつ：僕は天使ではない。

———じゃあ、ご自由に。

———そちらこそ。

———・・・

———・・・

———どうして付けて来るの？

———付けてない。

———行き先が同じってこと？

———そうらしい、このまま行くと...

———一緒にいきたいの？ 行きたくないの？

———さあどうかな。

———もう道づれよ。

———僕は熊本へ行くんだ、と彼は言った。

———私も、 と彼女は答えた。

翼のある少年は、決して彼女の瞳を見ようとしなかった。この翼はほんの偶然なんだ、少年は言った、本当は困ってるんだ。人生の中で大事なことは、そういう風に突然やって来るものよ、少女は説明した。小さな翼が大きく大きく広がった。そして元のままに縮んだかと思うと、小刻みに羽根が震えた。

II

夢の中で、誘拐された人たちに混じって船に乗っていた。木造の船は揺れ、うねる。すぐ近くには浜辺も見えた。人質は老人から子供まで、みな悪臭を放っていた。トイレも、水も、食糧もない。ケンカし、言い争った。小窓から外をのぞくと、白い女が砂浜を歩くのが見えた。金髪は足首まで伸び、長く白いドレスはとても清潔だった。五歳ぐらいの女の子と手をつないでいた。二人とも美しく、少女の長い巻き毛も金髪だった。二人は船に向かって歩いてきた。それは信じがたい光景だった。こっちに来るな、危ない、そう伝えたいけれど声が出なかった。二人ははしご段を昇り、汚れて騒がしい連中のなかで私の前に座った。奴らが別の船でやって来るぞ、誰かが言った、誘拐犯が俺たちを連れに来る、と。立ち上がって戦えばみんな自由になれる、誰かが言うと、人質はすぐさま武器を手にとり、構えては撃った。銃弾が船を突き抜けた。多くの者が死んだ。白い女は消え、少女は大きな瞳で私を見つめていた。私は彼女を抱きしめ、小さな穴から別の船室へと、少女を腕にかかえたまま逃げていった。トンネルを抜けると、博物館の中に出た。そこから夢は白黒

に変わった。博物館では、あの船の事件の 50周年を記念して、大きな写真がかけられていた。私の目の前で叫んだり銃を撃ったりしていた人たちが、写真の中に見える。そしてあの少女も、今私の横にいるそのままの姿で。展示パネルには、生存者のその後が記されていた：現在の職業、住所、年齢。私はどこにもいなかった。被害者の中にも、生存者の中にも、手掛かりはなかった。突然私は恐怖を覚えた。自分の体や顔が思い出せなかった。

少女が私の横で言った、Why are you so afraid?

— 怯えてなんかない、と私は答えた。

— 怯えてる。

— ちがう。

— 自分がどこにいるのが、知りたくないの？

— 知りたくない。

— 本当に？

— じゃあ、あなたは何でも知ってるの？

— (少女は微笑みながら) 何をそんなに怯えてるの？ どうせみんな幽霊なのに、ゆっくり

とそう言った。

背筋がぞくっと震えた。

—とにかく私たちはみんな死んでるの、少女は私をじっと見つめて繰り返した。

心臓が速まり、あごがガタガタ震えた。みんな、、、死んでる、、、生者も死者も。博物館の客、写真の人たち、少女、私、、、一体いつから？

少女は博物館を去り、私は後を追った。庭園で、緑の髪と黒い目をした褐色の少年に出会った。二人は手に手をとって遊び、笑った。遊び疲れると、三人で芝生に座った。ママは友達と遊ばせてくれないの、だからこれは内緒よ。少年は天使なのだと、すぐに分かった。そして、幽霊の少女は天使の少年と遊んではいけないのだと、私もいつしかそう思い込んでいた。少年の髪を切ってしまうと誰も気づかない、と私は言った。彼はされるままに髪を切られ、極々短くなったその髪は金髪のように見えた。二人は幸せだった。そのとき私は気づいた、少女は私、そして天使の少年は、私が初めて本気で愛した男だと。

III

熊本。

城に向かって歩いた。少女の顔には大粒の汗が光っていた。体の芯の奥深くからあふれ

出る汗。透き通った源泉。羽ばたきが風を揺らせ、泉は凍りつく。少女は微笑んだ。少年が羽ばたくとなんて涼しいだろう、と少女は思った。本当に飛べるのか彼に聞いてみた。だって飛んでるのを見たことがないわ、実を言うと、翼はとても小さいし、まるで求愛のポーズをとる白鳥みたい。もちろん！と彼は答えた。立ち止まらずに、翼を広げることもなく。遠くはダメなんだ、と付け加えた。トイレに行くときは止まるの？少女は尋ねた。そうだよ、何もかも一度にはできないだろ。どうにかして彼を飛ぶ気にさせれば、そのうち自分も乗せてもらえるのでは、と少女は期待した。無理だね、と彼は言った。羽根の先でやさしく頬をなでながら。

熊本城の城門がすべて閉じられると、二人は隠れていた枯井戸から出て、直径一メートルもの石が連なる城壁を登り始めた。地上から城の一層目までは、少女の背丈の六倍もある。半分ほど登ると、石垣は傾斜を増し、さらに険しくなった。指を差し込む隙間さえない。両手から脊椎へこだまが走ったかと思うと、小さな体が下降し始めた。三百年か四百年も前のサムライのように、地表に舞い戻っていた。背中痛みが、太鼓を打ち鳴らすように響いた：重く、正確に。翼のある少年は、月の光をさえぎるハチドリのように、中空に留まっていた。自分でも信じられないほどの速さで羽ばたいた；指はまだ石の隙間を探しながら。地表では、落下の痛みなどもうどうでも良かった。少女の驚きは、小さな涙に変わった。それは、胸に秘めた夢のための、闘いの汗だった。

少年はのろのろと降り来たり、ようやく少女の髪に触れたとき、声が聞こえた：泣いて
るのね。彼は答えた：泣いてなんかない、翼が汗をかいてるんだ。少女が死ぬのはこれが
初めてではない、そして今度は永遠の死だと悟った。そういうものよ、遅かれ早かれ死者
は本当の死を迎えるのだから。

——でも、次は一緒に飛べるね、城へ登ることもできる、いろんなことができるよう
になったんだ。

しかし、少女にはもう聞こえなかった。翼のある若者は、激しい痛みを感じた。もし石
垣を滑り落ちたなら、その痛みの方がまだましだろうと思った。少年は二度と飛ばなかつ
た、喜んでくれる人がもういないから。羽根は灰色にくすみ、日本の城にもヨーロッパの
寺院にも、現れることはなくなった。人々は彼を、かなわぬ恋の天使と呼ぶ。恋人たちが
別れるとき、その羽音が聞こえるという。

.....
クリスティナ・ラスコン・カストロ著「花見」(出版社 UABJO 2006年/ 出版社 Tierra
Adentro 2009年)

同著書により 2005年、ベネメリト・デ・アメリカ短編ラテンアメリカ賞を受賞

.....
訳者: Sono MASUMOTO.